

## 第六章 鬼神来臨

1.

夜半、伊吹が布団の中で眠れずにいると。

隣で寝ていたすうくんが、むく、と起き上がった。

「……どうしたのだ？」

伊吹は掠れた声で尋ねる。

眠れないのは不安が原因だった。あの時見たあの奇怪な影、姿形は違うけれど、間違いなくあれは、電車で自分を襲った化け物と同じ種類のものであった。何なのかは分からない。伊吹の知る限り、あんな生き物はこの世に存在していない。けれど、間違いなくあの場所には立っていた。正体は分からないが、存在している禍々しい「何か」。

宇治川の論法に従えば、あれは、「鬼」ということになるのかも知れない。

もはや伊吹としても、馬鹿馬鹿しいと一蹴するわけにはいかなかった。確かにあの一本脚に一つめの大きな化け物は、この寺の裏の雑木林にいた。夢でも幻覚でもない。紅葉も見たのだから、伊吹一人がどうかしているのでもなかった。

そうなってくるともう、どれもこれもが一つに結びついてくる。信じたくない物事が、現実として伊吹に迫ってくる。

四月。伊吹が開いてしまったあの社は、やはり開けてはならないものだったのだ。遙か昔、伊吹の先祖が封じた鬼の腕が収められていた社だった。そしてそこには、かつて世を荒らしたという鬼が入っていたのだ。そう思うより他になかった。伊吹が開けてしまったことによって、中に入っていた鬼たちが外へとあふれ出し、人を襲うようになっていく。伊吹は、道成寺刑事の聴取の言葉を思い出した。

「……ここ何ヶ月か、この地方でも急に変死の件数が増えたから、わたしなんか慣れちゃったもの。山で急に行方不明になった人も大勢いるし」

あれももしかすると、「鬼」に襲われた人のことなのではないか？

最近になって原因不明の死者が出るようになったのは、鬼が里へ下りて

くるようになって、観光で山や川を歩いている人が、襲われるようになったからではないのか？

そして、伊吹自身もまたその被害者なのだろう。あの、電車を襲って車掌を殺した八本脚の化け物。あれも本来なら、社の中にいて封印されているべきだった「鬼」の一種なのではないだろうか。何らかの方法で、社を開放した張本人である伊吹を見つけ出し、襲いかかった。

だとすれば――。

雑木林に現れたあの一つ眼の化け物も、目的は同じなのではないか。

思えば昼間、神社で感じた視線というの、あれがどこからか見つめていたものだったのかも知れない。吉野との一件があつて途中から気にならなくなっていたが、あの神社で伊吹を見つけたあれは、伊吹のことを、あとから追っていたのではないか。そうして、ついに家までたどり着いたのではないか。

すると。

――あの電車の時と同じ、夜になった今。

何が起きてもおかしくない。

伊吹はそう思って、眠れずにいた。

まったく自分でも、どうかしていると思えなかった。自分が鬼などという非現実的なものを真剣に検討していること自体、少し前なら絶対にあり得ないことだった。しかし、何と言おうと見てしまったものは現実的なのだ。二度に渡って自分が観測してしまったものである以上、これは認めなければならぬ。そして一度認めてしまうと、もうそれは恐怖でしかなかった。

存在を認めたところで、伊吹にはどうすることも出来ないのだ。あんな化け物に襲われて、またしても運良く助かるなど、いくら何でも考えられなかった。偶然はそう何度も重なるものではない。あれが何を狙っているのかなど想像すら出来ないが、向かってきたが最後、殺されるのが落ちである。

夜、家で寝ている間に入り込んでくるのか。それとも昼間、外出した時に現れるのか。逃げられるとも思えなかった。最初に電車で襲われたとき、あの容赦のない打撃を思い出し、身体の芯が冷えてくる。

昼間、パニックを起こす紅葉のことは、何とか口先と適当な物理学の理屈（「日が沈み出すと暗がりには重力レンズが発生して、錯視を引き起こすのだ」）でごまかしておいたが、しかし伊吹自身の怯えは、夕食時になっても、風呂に入っても治まらなかった。何をしても、取り憑かれたようにあの奇怪な影が頭をよぎる。あの眼差しを、全身に感じる。そのたびに、身が震える。紅葉やほたるからも顔色が悪いと言われたけれど、何も応えることが出来なかった。

それもこれも、元はといえば、伊吹自身に責任があるのだ。

四月に紅葉の忠告を聞かず、社の扉を開けてしまったから、だからこんなことに巻き込まれている。そこから全てが、おかしくなっていた。

東京で暮らしていた頃、サンフランシスコで暮らしていた頃、伊吹の周りは秩序で充ちていた。全てが厳格な規範と理に則って動いていて、ただそれだけだった。目の前に見えるものといえば父と母のどうしようもない対立ぐらいのことで、その不快から逃れるために、伊吹は物理学に熱中していたようなものだった。

しかし、この隠野へやってきて、何もかもが逆転した。あらゆるものが無秩序であり、渾沌に感じられた。奇妙な熱気が、山や森に籠もっているように感じられた。それが何なのか、伊吹には分からない。そうしたものを感覚で把握するのが、伊吹は極端に苦手だった。しかしそんな伊吹であっても、この地の異様さは身体で解することが出来た。もしかしたらそれが、宇治川言うところの「もの」や「すだま」なのかも知れない。

そしてそれらを最後に集約するのが、「鬼」だった。

全ての発端は「鬼」なのだ。四月に無思慮にも扉を開いてしまったのは、それが「鬼」にまつわるものだと聞かされたからだだった。吉野の誘いに乗って調べ物を始めたのも、「鬼」について調べることになっていたからである。そればかりではない。考えてみれば、今日の昼間、父の名前を出さただけで激昂してしまったのも、その話が「鬼」の概説と共に出されたからのように思えた。「鬼」の話題で神経が昂ぶっていたところに父の話がされたために、一気に怒りを表に出してしまった。

——とにかく自分は、鬼が嫌いだ。

改めて伊吹はそう思った。それから、一体それは何故だ、と考えたとこ

ろで、隣のすうくんが、布団から身を起こしたのだった。

暗い部屋の中、すうくんは布団を出て、部屋の外へ出て行こうとする。困惑した伊吹は、さらに隣で眠っている紅葉を起こさないよう気を付けて、後を追った。

パジャマ姿の伊吹は、廊下を歩いていくすうくんに小声で話しかける。

「……どうしたのだ、こんな時間に」

だが、すうくんが応えるわけもなく、そればかりか振り向こうとすらしなかった。まっすぐ迷いなく先へ進み、玄関にたどり着く。そしてすうくんは土間に降りると、家の外へ出て行こうとした。今は夜の二時過ぎである。

「おい、どこへ行くのだ!？」

伊吹の小さく鋭い声に、すうくんはようやく振り返った。

窓から射す月の光の下で見ると、すうくんは手に、あのいつも持ち歩いて遊んでいる仮面を持っていた。前に伊吹が手にとって眺めようとしたら、怒ったすうくんにたちまち取り返されたことがある。面と言っても、能で使うなめらかな表面の工芸品ではなく、木から鑿のみだけで彫り出したような、無骨でざらざらとした表面のものである。形としては、鼻先が少し尖って、犬や狐の顔に似ていた。口は耳元まで裂けている。眺めているだけで、取り込まれそうな心地になる。

何より以前から不思議だったのは——眼の穴が四つ彫ってあるところだった。

紅葉から聞いた、昔話の鬼神とそっくりだった。

いや、それだけではない。

これを見る度伊吹は、どこかで見かけた何かを思い出しそうになる。

ぼんやりとした視界の中に、何かが浮かび上がりそうになる。

伊吹は、眉を顰めた。

すうくんは構わず、戸を開けて外へ出て行った。服はパジャマに、裸足のままである。急いで伊吹はついていく。

するとすうくんは、玄関から出てすぐのところで立ち止まって、黙ったまままっすぐに山門の方を指さしていた。つられて伊吹は、そちらを見る。

山門の向こうには、月を背にしてあの一つ眼の化け物が立っていた。

伊吹は腰を抜かしそうになる。逆光になって、化け物の顔は分からない。ただ、その大柄な身体をたった一本の脚で支えて、何も言わずに立ちつくしているばかりだった。

急に化け物はくると背を向けると、飛び跳ねながら向こうへと去っていく。

悪い冗談のような光景だった。

同時に――。

すうくんがその影を追って、ものすごい勢いで駆けだした。

目を疑うような速さだった。気づいたときには伊吹のそばから姿を消して、彼は山門の辺りに立っていた。そこで周囲を素早く見廻し、化け物の行方を捜している様子である。一瞬何が起きたか分からず、茫然としていた伊吹だったが、慌てて後を追って走り出した。

「ま、待って……」

しかし伊吹の言葉には耳を貸さず、すうくんはあつという間に寺から出て行ってしまった。まるで、風のように駆けていった。伊吹が山門まで行き着いたときには、すでに表に姿はなかった。ただ、聞こえてくるかすかな足音の方角から、どうやら町へ向かう道とは逆方向の、山へ通じる道に向かったらしい。幸いこの先は一本道で、少し行くと、溪谷に掛かった大きな橋がある。追いさえすれば、少なくとも見失うことはない。けれど。

夜、屋外で、しかも山へ向かう。

さらに、行った先にはあの一つ眼の鬼が居る。

伊吹はまた脚が震えだしそうになった。

だが。

――すうくんを行かせたままには出来ない。

心を決めて息を吸い込むと、伊吹はサンダル履きのまま、すうくんを探して真っ暗な上り坂を一人、走っていった。

2.

何とか橋までたどり着いた。息が苦しく、伊吹は膝に手をつけて咳き込む。

ここは隠野山を裂くようにして流れている隠野川にかかる大橋であり、渡った先には、山中の散策コースがあった。少し前まではこうした自然を前面に押し出したエコツーリズムを、こくりの市は売りにしようとしていたのだが、四月頃から山中や川沿いでの死亡事故が多発していたために、最近ではすっかり客足も途絶えていた。たぶんそれも、あの「鬼」のせいなのだろう、と伊吹は思う。

伊吹は顔を上げる。月の光が射して、幅広の橋の上が明るみに出る。

橋の上にはあの「鬼」とすうくんが、向き合って立っていた。

すうくんはいつの間にか、あの假面を被っていた。小さな顔の全面を覆って、今どんな表情をしているかは窺い知れない。しかし、彼はすと背を正して、鬼を正面から見据えていた。年端もいかないその外見にまるでそぐわない、凜とした静謐な雰囲気を感じていた。

そして対する一本脚の鬼の方は、そのぎよろりとした巨大な眼を見開いて、すうくんを凝視していた。感情はない。目玉がこぼれ落ちんばかりに、ひたすらすうくんを視線で捉えている。明るい場所で見ると、その上半身は下半身と比べて極端に大きく筋張って、不釣り合いだった。ごわごわとした毛もそこかしこに生えている。肌は、土のような薄汚い色合いだった。腕は、丸太のように太い。

突然、鬼は空を見上げると、

谷中に響き渡る咆哮を上げた。

そしてそれに応えるように――。

すうくんは一足飛びに、鬼へ襲いかかっていった。

「……待て！」

伊吹は何か叫ぶ。しかし間に合わない。

すうくんは鬼の身体に飛びつくと、頭突きを喰らわせる。小さな頭が化物の身体に激しくぶつかり、一瞬鬼は蹠踉めく。しかし体格差があまりに大きく、たちまち跳ね飛ばされて、すうくんは橋の手摺りに叩き付けられてしまう。鈍い金属音が響いた。

「……！」

愕然とした伊吹は苦しい呼吸を無理矢理整えると、すうくんに駆け寄ろうとする。駆け寄ってどうしよう、という考えは何もなかった。だが、幼い子がそんな目に遭うところを見ていられない。  
——自分に来ることなど、何もないけれど。  
ただ見ているだけでは、耐えられなかった。  
すると、その時だった。

『来るな!』

そんな鋭い声が、どこからか聞こえた。  
驚いた伊吹は、辺りを見渡す。しかし、自分たちの他には誰もいない。  
そうして、再び倒れているはずのすうくんの方を見返すと——。

橋の上には、伊吹と同じ年ぐらいの、少年らしい立ち姿があった。

そのしなやかな筋肉質の身体は、何もまどっていない。黒々とした波打つ豊かな髪が、肩の辺りまで伸びている。その中から、ねじれた双角が生えていた。彼は俯いている。

加えて——その顔は、人間のものではなかった。犬のようにせり出した鼻、耳元まで裂けた口も異様であったが、何より、眼が四つ並んでいた。

黒い四つの瞳が動き、一斉に伊吹を睨め付ける。

それは、すうくんの持っていたあの面と、同じ相貌だった。

瞬間——伊吹は、谷で見た何かを思い出した。

少年は無言のまま、再び鬼へと向き直ると。

両手の爪を剥き出しにして、異形に飛びかかっていった。

黒髪の少年は瞬時に相手に駆け寄り、爪をそのまま、鬼の大きな眼にがつしと突き立てる。

「ぐがああああああああああああああああああああああああああああああああ  
ああああ」

鬼が耳に染み付いて離れなくなるような醜い声を上げると同時に、その

眼から、透明な液体が血と共に大量に噴き出した。少年はそれを、頭から被る。

おそらく前が見えなくなったであろう鬼は、怒りにまかせて両腕を激しく振り回した。強烈な一撃が、少年の脇腹に当たった。彼はセメント造りの橋に、勢いよく引き倒される。裸のままの全身をざりざりと擦って、少年はきつい呻きを上げた。

身を起こした彼の身体からは、血が滴り落ちている。しかしそれを気にも留めず、少年は再び立ち上がると、身を動かしてばきばきと骨を鳴らした。

そして、ああ、と一声、喉の奥から絞り出したような唸りを漏らす。鬼の体液がその身体を濡らして、艶めかしくぬらぬらと光っていた。

少年はまた、鬼に挑んでいった。

たった一つの目が見えなくなった鬼は、痛みにもがき苦しんでいる様子だった。一本の脚が震え、太い腕で身体を支えている。少年に対する怨嗟の念が声になって溢れ出ている、伊吹の元まで届いていた。身体の内をどろどろと流れる薄汚い情念があつて、それが口から全て出ているように聞こえた。鬼は腕を振り回し、少年に当てようとしている。

少年は鬼の背後に回り込むと、背から飛びかかって、その太い首に腕を回した。

そのまま、彼は力任せに締め上げる。

息が出来なくなった鬼は、口から泡を吹いて苦しみだした。

ひい、ひいという鬼の細い呼吸が、伊吹にもはつきりと分かった。鬼はさらに激しく腕を振り、それは何度も少年に当たっていた。少年の白い肌も、殴られたところが次第に赤黒く変色していつている。彼自身、当たる度に顔を歪めていた。けれど、少年はそれにも全く怯むことなく、鬼の背に取り付いたまま、首をきつくきつく締め付けている。

やがて、がは、ごほという鬼の咳き込む声が聞こえだす。

そして鬼は、その場に顔からうつぶせに倒れ込んだ。

どん、と鈍い音が谷に響き、鬼の身体がびくびくと震え出す。だがそれでも、少年は一切の容赦なく、鬼の首を固く固く締めていった。少年の締めている部分が明らかに他よりも細くなっている、まるでそれは、捻れた



風船のようにすら見えた。

鬼の顔色は土気色を越えて、青く黒くなっていく。少年が力を込めると、それに合わせて鬼の眼に開いた傷から、血や体液がどろどろと流れ出した。彼らの周囲には、彼らから流れた血や液体が飛び散って、溜まり始めている。伊吹はもう、見ているのが辛くなってきた。いつそのこと、一気に頸骨でも折って殺してやればいいのに、と思える。すんなりと楽にしてやればいいのに、しかし少年は、ひたすら締め付けていった。

ようやく、鬼の動きが止まった。

肉の塊になった鬼が、橋の上に横たわった。

月光に照らされても、それはやはり薄汚く不快なものでしかなかった。

裸の少年は、その異形の死骸を四つの眼で、見下し蔑んでいるかに見えた。

美しい黒髪はしとどに濡れ、身体は血に塗れている。骨もあちこち、折れているようだった。痣も、剥き出しの肌にくつも残っている。それでも、彼は誇り高くその場に立っていた。山と谷の全てを見晴るかすかのごとく、少年は筋張った首を捻り、辺りを見返している。伊吹はそんな彼の姿を、橋の袂から息を呑んで、見守っていた。

山奥のあの鬼の谷で、ぼやけた視界の中見たものを伊吹は思い出す。

——あれは。

少年は何も言わず、鬼の死骸の皮を両手で掴む。

そしてそのまま持ち上げると、力一杯橋から谷底へと投げ捨てた。暗闇の中に不気味な遺骸は姿を消し、そして数秒後、遠くから大きな水音が響いてきた。後に残されたのは、コンクリートの一面に広がった、血と体液の染みだけだった。

その時。

少年はふと思いついたように、伊吹の方を振り向いた。畏れを覚えさせる彫りの深い相貌に、伊吹はギリシアの神像、あるいはなぜか、古い樹木を思い出した。緊張に、身が竦む。

そして次の瞬間。

彼は、伊吹の元へと、間髪を入れずに駆け寄った。

たちまち正面にきたかと思うと――。

気づいたときには伊吹は喉を、右手で掴まれていた。

逃げる間もなく、伊吹はその場に押し倒される。

「ちよ……つと……」

土と草の上に倒れ込んだ伊吹は、苦しげに手足をばたつかせる。けれどももちろん、少年には全く通じない。間近で見ると、少年のその神のような面立ちからは、人間らしい感情を推し量ることが一切出来なかった。

彼が何を考えているのか、何を思っているのか、そもそも感情を持ち合わせているのかすら、分からない。なぜ喉を押さえたのかも、分からなかった。少年はそのまま、伊吹に馬乗りになると、顔を近づけてくる。

少年の息が顔に掛かり、伊吹は恐怖に身を震わせる。

少年はそれこそ犬のように、伊吹の匂いを嗅いでいる。続けて伊吹の頬を舐め、そして、首筋を舐めた。

何となくだけれど、伊吹は、彼は興奮しているのだ、と勘づいた。だが、身動きが取れない状態では、どうすることも出来ない。ただただ少年の顔と、四つの眼を見つめて、助けってくれと懇願するしかなかった。

しかし――。

少年は、ゆっくりと口を開く。

鋭利な牙が、その中に並んでいる。

伊吹は、心底からの恐怖も覚えたが、同時に、理由の知れない畏怖心と神々しさを感じた。

伊吹は、目を瞑る。

そして、少年が己の口を伊吹の口に合わせようとしたその時。

彼は唐突に、全身をびくりと震わせた。

ぐう、という低いうめき声を上げる。

そうして、力を失った彼は――伊吹の身体の上に、ばたりとくずおれた。何がどうなったのか分からず、伊吹はしばらく、そのままの姿勢で目を瞑っていた。気を抜いたかと思わせて、いきなり伊吹の服を引き裂いてくるのではないか。そんなことを考えて、伊吹は緊張しながらじっとしていた。

けれど、いつまで経っても何も動く様子がない。いや、そればかりか、どうも同年代のあれだけの体格の少年がのし掛かってきたにしては、気づ

くと妙に身体の上が軽かった。奇妙に思い、伊吹はそつと目を開いた。

そして——愕然とした。

伊吹の上に乗っていたのは、裸になっているすうくんだった。傍らには、あの仮面が転がっている。

3.

——伊吹は、目を覚ました。

がばりと布団を押しつけて身体を起こすと、そこはいつもと同じ、紅葉と共同で使っている部屋だった。カーテン越しに、朝の光が射し込んでいて、時計を見ると、時間はちょうど午前六時十五分だった。

右隣の布団には、紅葉が気持ちよさそうに寝入っている。そして二人の間の小さな布団には、すうくんが横たわっていた。片手で仮面を握りしめたままだった。普段と何の変哲もない光景である。

「あれ……夢……？」

そこで伊吹はおもむろに、ぐっすり眠っているすうくんをちらりと見る。

その掛け布団をそつと捲ると、Tシャツの中の、細く頼りなげな首筋を見た。

青黒い痣が、何カ所も残っていた。

細かい擦り傷や切り傷も、無数に刻まれている。

伊吹は沈黙すると、再び布団を元に戻した。

——夢では、ないか。

そもそも昨晚、この子が寝るときには、ちゃんとパジャマを着せたはずである。夜のあの出来事の後、裸で血と体液に塗れたすうくんを負った伊吹は、一人で家へと帰り、家族の誰にも気取られないよう細心の注意を払いながら、シャワーですうくんの身体を簡単に流して、自分のTシャツとパンツをとりあえず穿かせ、寝付かせたのだった。

起き上がると、すうくんの傍らに正座した伊吹は、その小さな姿を、静かに見つめる。

そして、あの夜半の橋での戦いを思い出す。

——やっぱり、この子は。

さらに、電車で襲われたあの夜。

連れ去られた先の谷で見た、巨大な顔のことを思い出す。

そう、昨日の一連の出来事によって、伊吹は記憶の奥底に封じていた、あの日見た「もの」たちを、ようやく思い出したのだった。

割れた眼鏡の向こうであったため、谷での鬼たちの戦いぶりにははっきりとは見えていなかったものの、すぐ目前まで迫ってきた、四つ眼の異形の姿は、頭のどこかに残されていたようだった。自分の身体をあの夜舐めた、巨大な顔。

昨晚見た、凜々しい少年の顔と、それは同じだった。

違うのは、もちろん大きさである。昨日の少年は、鍛え上げられた美しい体つきはしていたものの、身長が伊吹よりわずかに高いくらいで、そう大して違わなかった。一方、鬼の谷の四つ眼は、まさしく千年と生き続ける大樹のように、見上げるほどの巨体で、まるで伝説に出てくる巨人か何かのような顔である。

——伝説の巨人？

そう自分で考えて、伊吹は首を傾げた。

紅葉が以前語っていた、あのスクナ様の伝承。紅葉はこう語っていた。

「スクナ様はな、大きな体に、角を二本生やして、眼が四つもあって、口は耳元まで裂けとったんやって。耳も大きかったってひいばあちゃん言うてたし、イヌみたいな顔なんかなあ。布に穴開けて頭から通すような簡単な服を着て、森の中に一人で棲んどったんやって」

伊吹は無言になる。

すうくんは名前を訊かれると、いつもただ、「すう」とだけ応えていた。

——スクナ様。

伊吹は何も言わないまま、すうくんの綺麗な横顔を見つめていた。

ふいに、こんこん、と控えめなノックの音が聞こえると、部屋のドアがゆっくりと開いた。

「あの、お姉ちゃん。すうくん。よかったら、今日もラジオ体操行かへん……？」

恐る恐る向こうから顔を出したのは、ほたるだった。

その瞬間。

突然ぱつちりと目を覚ましたすうくんは、むくりと身体を起こすと、元氣よく立ち上がり片手を突き上げて言った。

「くー！」

すうくんの上半身は、伊吹の持っているアインシュタインがあかんべえをしている柄のTシャツだった。お腹が冷えるといけないので、裾はパンツに入れてある。

パンツは伊吹の、ピンクのしましま模様のリボンの付いた、一番かわいい品だった。

ほたるは眼と口を真ん丸に開けて、それを見ていた。

幸いその後は、何事もなくラジオ体操へ行き、帰ってくる事が出来た。驚いたことにすうくんは、昨晚の傷を気にも留めず、昨日以上に元氣よく体操をしていた。小学生の子たちに囲まれて可愛がられていて、すうくん自身もご機嫌だった。不安になった伊吹は、昨日月の光の下で見た傷の箇所をいくつか調べてみたが、しかしそこには、怪我の痕跡すらすでに残っていないかった。折れていた骨も、治っているらしい。信じがたいけれど、そういうもの、と考えるより他ないだろう。

それともう一つ幸いなことには、ラジオ体操をやっている小学校に、今日は吉野が来ていなかった。内心、居て欲しいような居て欲しくないような、微妙な気持ちでそわそわしていた伊吹だったのだが、いざ行ってみると、居なくてよかった、と正直なところ感じた。あれだけ小さな子たちが集まっているところで赤面して狼狽したら、一体どんな醜態をさらすか知れたものではない。

若干の寝不足気分の中、ぼんやりと伊吹はうる覚えで体操し、スタンプをもらっているほたるを、何も考えずに眺めていた。

4.

「さて！ 今後の夏休みの計画についてでなんでございますけれども！」  
他に誰も客がないのをいいことに、安達紺は喫茶『るーじゅ』の窓際

の席で、大声を出した。

「どないいたしますかね」

「紺ちゃん、元気だね……」

気弱な声で澄哉が苦笑する。今日は澄哉は、今までにないほどにフェミニンな服装をしていた。上は薄手の半袖カーディガンで、身体にピッタリとしたジーパンを穿いて内股で椅子に腰掛けていた。一方の紺は、「U・S・A!」と書かれた頭の悪そうなTシャツに、虫取り少年のような短パンを穿いている。日焼けで全身真っ黒になっていて、どこを見ても花の十六歳女子高生らしいところはなかった。

伊吹はアイスコーヒーをストローですすると、やる気なく応えた。

「なんでもいいんじゃないか……?」

「なんやのいぶちゃん。気いのない。せつかくいぶちゃんもウチらも本調子を取り戻してきたとこやし、改めて計画を練り直そ、って話やないの。それに、新キャラも加わったことやし。なーすうくん」

「なー!」

伊吹が注文してやったロールケーキを一生懸命手づかみで食べていたすうくんだったが、紺に話を振られると、嬉しそうに笑みを浮かべた。かーいらしい子おやなあホンマに、と紺は、すうくんを抱きついて、頬を擦り擦りさせる。

そんな光景を見て、何とも言えず微妙な心地になった伊吹は、窓から外を眺めた。「るーじゅ」と反転したひらがなが、ガラス一面に貼り付けてある。

外には、駅前の小さなロータリーが見えた。鬼の伝承が刻まれた石碑や、鬼の銅像が申し訳程度に建っているが、その他には錆び付いた時計、古びたバス停、手入れのされていない花壇、明らかに周囲から見えて浮いている芭蕉の木など、いかにも田舎の町らしい様子が広がっていた。一体いつ立てたのか分からない手書きの観光案内看板には、「ようこそ! 鬼の郷へ」という文字が、下手な明朝体で記されている。

それから伊吹は、すうくんを見返した。どうやら昨日のあの端麗な少年と、このすうくんは、同一人物らしい。おまけにあの巨大な四つ目の鬼、スクナ様も。

つまり、この子は伝説の鬼神、スクナ様が、人間になった姿ということになる。

それが現実的かどうかなど、伊吹にとってはもはやどちらでもよいことに成り果てていた。確かめようがないが、どうやらそうらしい。認めざるを得ない。そうした物事は、下手な考えを加えず、受け止めるよりほかにいのだろ。そしてさらには、彼が二度にわたって、悪しき鬼から伊吹の命を救ってくれたことになる。

それにしても、もしその通りだとすれば、一体なぜ、彼は人間の姿になつてしまったのだろ。何をきつかけとして、こんなことが起きたのだろ。神様が人間になる？ 「神様」というものが実在すると仮定したにしても、そんなことが果たして、あり得るのだろ。あつてよいのだろ。原因は何なのか。ちよつと考えただけでも、疑問は尽きない。検討に値する難題だろう。

しかし――。

正直に言えば、どちらかという、今の伊吹にとっての切実な、身に迫つた問題はそんなことより、昨日押し倒されたときの方だった。

伊吹ははあ、と息を吐く。

あの時は、あんな血みどろの戦いの直後だったせいもあつて、傷つけられる、殺される、という瀬戸際の恐怖感の方が勝つていた。けれど、落ちていた今になって思い返してみると、恐らくあれは、そういうことではない。

伊吹ももう十六歳なので、それがどういふことなのかぐらいは分かっているつもりだった。

――だが、そうなる。

この極端に分離した姿をどう受け止めればよいのだろうか。伊吹は困惑していた。一方では愛らしく、素直な幼い男の子であり、他方では、凶暴で力強い一人の本能的な少年である。そのどちらもすうくんであり、同じ人間――ではないにしても、同じ存在であることに違いなかった。だとすれば、すうくんには自分はどうか接すればいいのか。

もちろんすうくんは、変わらず愛らしいと思う。けれど、ともすれば伊吹は、あの時息も荒く押し倒されたときのことを思い出してしまふ。頬や

首を執拗に舐められた感触が、肌に蘇る。思い出すと、顔が赤くなってくる。この子とこれからも、一緒に暮らさなければならぬのだ。

——この感情を、どう処理したらよいのか。

「……どしたの、伊吹ちゃん。顔赤いよ」

澄哉が不思議そうに首を傾げた。

「へえあ!? な、何でもない……」

急なことで喉から変な声が出てしまう。必死にごまかそうとするが、そうすればするほどに赤面はひどくなっていた。そんな伊吹の姿を見て、うふふん、と言つて変な顔をした紺は、眼を細め、ニヤニヤとテーブル越しに顔を近づけてきた。

「へえ、いぶちゃん。ひよつとしたらどこかで何かええことがあったんかな? ふふふん」

「紺。そういうときのお前、ウチの結婚できない叔母とそっくりだ」

この一撃で、あっさり紺は沈黙した。代わって澄哉が尋ねる。

「ねえ。吉野くんってどうかしたの?」

「え?……ああ、さっきメールで、今日は来られない、と連絡があった」  
伊吹は呟いた。正確には、今日はやめておくわ、昨日のことは気にしないでくれ、という、気を遣った文面だった。心配りが、妙に腹立たしい。別にあんな奴に気を遣われる筋合いはないのに、と伊吹は内心思つて、どう返信したらよいか分からなくなっていた。結局、そのままにしてある。

——好きだ。

——付き合わないか。

耳に、あの日の声が染み付いている。

あああ、と伊吹は深々とため息を吐いて、テーブルに突っ伏した。紺と澄哉は、数日ぶりに会ったクールなはずの友人の変貌に首を傾げていたが、しばらく放っておいてやった方がよい、と考えたのか、黙って話題を転じた。

「ところで、『鬼は存在する』という証拠で、何か見つけた? すみちゃん」

「うーん、証拠っていうわけじゃないんだけど……ちよつと調べると、いろんな伝承が出てくるね。スクナ様の話の他にも、人が鬼になつてしまつ



たつていう昔話を、いくつか見つけたよ」

そう言って、澄哉は持ってきていたポシエットのの中から、古い文庫本を取り出した。

『鬼の面』っていう話なんだけど……』

途端に伊吹は、勢いよく顔を上げた。眼を見開いて、澄哉の方を見る。

「面？」

「う、うん……ちよつと他の地方には見あたらない、変わった伝承なんだけど……』ある時村はずれに、一軒の小屋があった。村の長がそこを尋ねると、中では見覚えのない男が、一心に木から削りだして、無数の假面を作っていた。ただ、その面は普通の面ではなく、奇怪で怨念の籠もった眼差しをした、鬼の面だった。一つ一つ、狂った異形の姿をしている。村長は、なぜそんなものを作るのか、と男に尋ねた。すると、手入れをしていない長い髪を振り乱したその薄汚い男は、愚か者を懲らしめるためだよ、と言って、にやりと笑った。村長は気味悪く感じたが、それだけでは罰することも出来ず、そのままにして帰った』

澄哉は文庫本に書かれたおどろおどろしい文章を、独特の可愛い声で朗読している。伊吹は一心に聞き入っていた。すうくんは今も、あの四つ眼の假面を持ってきている。普段歩いているときは、ズボンの後ろに挟んでいた。

『その夜は、村の祭りだった。男は面を地面に並べて、隅に座っていた。大人は気色が悪いと見向きもしなかったが、子どもたちは喜んで、それらの鬼の面を手を取った。男は代金も取らず、子どもたちにそれらの面を与えてやった。子どもたちは面を被り、踊って遊んだ。気づいたときには、男はその場から居なくなっていた。鬼の假面を被った子どもたちは、篝火に照らされて踊り廻った。そうして、明くる朝のことだった』

そこで澄哉は、ぱたんと本を閉じた。

拍子抜けした紺は、目を瞬かせて尋ねる。

「ほんで、明くる日？」

「……ここで、おしまい」

「えー!？」

すつとんきような声を出して、紺は肩を落とす。澄哉は頭を掻いた。

「ここから先は、誰の口にも伝わっていないなかったらしいんだ。元々この先がない話だったのか、それとも、あつたけれども語ってはならない続きであつたのか……今となつては誰にも分からない、って、この本を書いた研究者の人は言ってる」

「なんや……よけい悪い悪いわあ……」

心なしか青い顔になつた紺は、身体を震わせていた。伊吹も何とも言い難い厭な話だと思つたが、気になるのはそれよりも、鬼の面の話だった。

あまりにも謎が多すぎる昔話であるため、すうくと繋がりがあつたのかどうか推測できない。少なくともすうくんは、假面を被ると鬼になる、あるいは戻るようだが、それと何か関わりがあるのだろうか。まさかすうくんが実は普通の子どもで、鬼の面に乗っ取られているのだ——というのは、あまりに単純に過ぎるだろう。それにしてもすうくんは、不思議なところが多すぎる。

それに、宇治川の話を出せば、人は変化して異常な鬼になるのではないのだ。人の世という軀を解かれることで、本来の姿に戻つて、鬼になる。だとすれば、この物語の落ちも、おのずと見えてくるのではないだろうか。

物語自体は関係がないにしても、「鬼」と「假面」というモチーフは、どこかで連関があるものなのかも知れない、と伊吹は思った。これも、宇治川辺りに訊いてみれば、何か面白いことが明らかになるかも知れない。

「あ、せやせや、ウチな、お父ちゃんに教えてもろて、おもしろいもん見つけてん。これ、ええ証拠やで〜」

そこで何かを思い出したらしい紺は、背負つてきていたナップザックを開くと、中に手をつ突っ込んでがさごそと探り出した。用途不明の釘や溶けかけたキャンディなどが出てきた挙げ句、テーブルの上に広げられたのは、一枚の新聞記事の切り抜きだった。

「これは……」

記事は、十年ほど前の地方紙のものらしかった。細々とした字の横に、カラーの写真が載っている。

そこには、四つの眼が彫り込まれた、奇妙な形の土偶が写っていた。

「え!?!」

裏返った声を上げる伊吹に、紺は得意げに腕組みをしている。すうくんはロールケーキ一巻きを一人で食べ終えそうになっていたが、いったんその手を止めると、口をもぐもぐさせたまま興味を持った風の表情で、新聞記事を覗き込んでいる。紺が解説を始めた。

「町で土木工事やっていると古墳が見つかったんやけどな、その中から出てきてんて。お父ちゃん役場で調査担当しとったから、よう憶えとつてん。東京の方からもぎよーさん研究者の人が来て、調べてったらしいよ」

「これ……スクナ様ってこと？」

澄哉が驚いていると、紺が呆れた声で言った。

「それ以外何に見えんのん。まー学者の先生はいろんな説唱えてるらしいけど、そんなんどこでもええわ。これは確実完全にスクナ様。古墳時代の人が、たぶん山かどつかでちらっとスクナ様を見かけて、ほんでビックリ仰天してこうやって像にして残した。従ってスクナ様は実在するのである。以上。証明終了」

「そんな短絡的な……」

思わず澄哉が呟くと、あんたおんなじチームやる!?と紺はやおら立ち上がったて手を振り上げる。澄哉は縮み上がった。

一方、伊吹は驚きの眼で、その記事を読んでいた。

「おそらくは同地の宿儺<sup>すくな</sup>伝承と関連があるものと思われるが、伝承自体は平安期のものであるため、時間的に前後してしまう、従って偶然のものとも考えられる」と記事は結ばれていたが、伊吹にとってはそれこそどうでもよいことである。伊吹は、すうくんを見た。すうくんは、長い睫毛の眼で伊吹を見つめ返している。どことなくその眼差しに深い感情がこもっている気がして、伊吹はなぜか、どきりとした。

——この子は一体、いつから生き続けているのだろうか。

伊吹はそう考え、何だか気が遠くなるような思いがした。普段、理論物理解や宇宙物理の本を読んでいると、千年二千年では済まないタイムスパンの発想はいくらでも出てくる。しかしこうしたもの、一種の思考実験の帰結に過ぎないのだ。その長大な時を生きる、と考えたとき、初めてリアリティが生まれてくる。喜びや悲しみといった感情が胸に浮かぶ。短命な人間である伊吹には理解できないことかも知れないが、果たしてどんな思

いを抱いて、すうくんは今ここにいるのだろうか。  
そう思つてすうくんを改めて見た瞬間、彼はケーキの最後の一片を口に放り込んだ。

分からないけれど、この子をこのままにしておいてよいのだろうか。伊吹は思う。本来この子は鬼神なのだ。こんなところでTシャツに半ズボン姿でケーキを食べさせておいてよい気はしない。紅葉の昔話を思い出せば、この辺り一帯を統べる神様と言つても過言ではないだろう。何とかして元の姿に戻してやった方がよいようにも思える。どうすればよいのかは、見当も付かないが。

——そういえばすっかり、物理学とご無沙汰になつてゐるな。

ふとそんなことを考えて、伊吹は肩をすくめた。家に帰つたら、勉強を再開しないといけない。このままだと、エレーナのことを笑つていられなくなつてしまう。

その時、横の窓ガラスがこんこん、と鳴った。

三人がそちらを見ると、『るーじゅ』と大書された向こうには、タンクトップにジーンズの短パンという無意味なアメリカンスタイルの、道成寺刑事が笑みを浮かべて立っていた。

5.

「……何の用なのだ」

「えー？ たまたまみんなを見かけたから声掛けただけじゃなーい。ひどいなー」

駅前のベンチに腰掛けた道成寺刑事は、そう言つて美味しそうにソフトクリームを舐める。『るーじゅ』の主人に彼女が無理を言つて、作つてもらつたものである。お互い知り合いらしかった。伊吹は彼女の隣に座つて、草木の植わつた芝生で遊ぶ紺とすうくん、それに巻き込まれる澄哉を、ぼんやりと眺めていた。

「大体何なのだその格好は。警察官がそんなことでもいいのか」

「今日は非番非番。あつつかいからさー、こんな服じゃないとやつてらんなくつて。わたし汗っかきなのに刑事だからってスーツで決めなきやいけな

くって、大変なのよ。谷間がムレてムレて」

刑事はそうそうぶく。これだけ陰惨な事件が連続している状況で担当の若手刑事が休みを取れるとはどうしても思えなかったが、疑っても仕方ない、と伊吹は忘れることにした。どちらかというとそのことよりも、彼女のタンクトップの胸元の方が気に掛かった。アメリカンなのは服装だけではない。スーツだと着痩せして分からないが、伊吹からすると腹立たしいほどの谷間がちらちらしていた。刑事がこんな扇情的でよいのかと思う。

そんな伊吹の気持ちの隙を狙ってか、刑事はあらぬ事を言う。

「ねー。カレシは今日はどうしたの？」

「へあ!? か、彼氏ではないと言っただろうが！ 吉野は今日は、家で休んでいるそうだ」

「へー。何があったのかなー」

にまにましながら、刑事は伊吹を見た。伊吹は目をそらす。そして言った。

「こ……こんなところで高校生をからかっているのか。また新しい事件が起こったんだらう!? 仕事をしなさい仕事を！」

「……そうなんだよねー」

赤面しながら伊吹が話を変えると、珍しく虚無的な表情になった道成寺刑事は、そう言って遠くを見る眼で呟いた。

しばらく会話が間が空く。伊吹も今朝のニュースでちらりと見かけたきりだから、詳しいことは何も聞いていないのだ。というより、あまり聞きたくなかった。見出しだけを見て、嫌になってチャンネルを変えた。

すると少し経って、道成寺刑事は億劫そうに口を開いた。

\*

事件が起きたのは昨日の夕方、隠野海岸でのことね。発見時刻は午後六時四十分、遺体を発見したのは小学三年生の男女三名よ。夏休み中ということもあって、それなりに水泳客も来ていたんだけど、やっぱり例の事件の影響もあって、例年と比べると格段に客足が少なかった。でもその子たちは地元の子だから、お母さんに連れてこられて、昼頃から大騒ぎして遊

んでいた。

日も沈み始めてそろそろ帰ろう、ということになったけど、子どもたちは嫌がってお母さんから逃げたのね。疲れているのに海に出て、泳ぐのも辛くなってきたてどうしよう、となったときに、近くを漂っているボートを見つけたの。三人はすぐにそこへ泳いで行って、上がり込んだ。そこに乗っていたのが、五人目の被害者。

今回の被害者は二十代後半の女性。以前と同様、首を切断されて、お腹で抱える形になっていたわ。死因は頭部打撲による頭蓋内損傷。たぶん、ゴルフのドライバーで殴られたのね。これ、内緒にしといてね。一応新聞とかには伏せてあるから。もちろん顔にはいつもと同じように、鬼の面が貼り付けてありました。

ただ、今回の場合、殺害されたのはまだ日が高いうちみたい。日中に殺害し、時間を掛けて遺体を加工して、それからボートに遺体を乗せて海に流した。潮の流れに乗って遺体は少しずつ海岸へ近付き、おそらくはおおよそ犯人の想定通りの時刻に発見された、と。

ボートに乗り込もうとして、女の子は中を覗き込んだ。その時、お腹の上から落ちてボートの脇に転がっていた遺体の頸部を、思い切り見てしまった。より正確に言えば、お面の覗き穴の向こうの命を失った眼と、まっすぐに視線を合わせてしまった。今女の子は、精神科で治療を受けてるわ。こうして、五人目と六人目の被害者は発見されました。

\*

「……六人目？」

相変わらず滔々と悪趣味に語る刑事の話しぶりにげんなりしながら、ふと引っかかりを覚えた伊吹は問い返した。刑事は気もなく返事する。

「うーん」

「どういう意味だ？ まさかそのトラウマを負った女の子が被害者というわけじゃないだろう？」

「違うよー」

刑事は呟くと、またソフトクリームをぺろりと舐めた。

「……お腹の上に首が上手いこと据わらなかつたのは、お腹が大きかったからなんだよね」

刑事は感情を込めずに言った。

伊吹はそれを聞いて、ゆっくりと自分の身体から暖かさが失われていくのを感じた。

蝉のやかましいほどの声が響いている。

「ねー……どうしたらいいんだろぅねー」

熱い日差しの下、道成寺刑事はまるで将来を語る女子大生のような無責任な口調でそう言っつて、またソフトクリームを舐めた。反対側から少し垂れてきているけれど、彼女は気にも留めていない様子だった。伊吹は何も言うことが出来ない。

すうくんと紺の歓声が、遠くから聞こえる。

「……ま！ 明日からまた頑張りますか！」

いつの間にかコーンまで食べきつていた道成寺刑事は、ふんつ、と気合いを入れると、急に立ち上がって大きく伸びをした。陽を浴びて、眼を細めている。

驚いて拍子抜けした伊吹だったが、何だかいつもより、彼女がずいぶん大人に見えた気がした。

「なーんか変な事件も増えてるしね。刑事さん気合い入れていかないよ。奇怪な連続殺人の他にも、あれやこれやともうホント大変なんだから。知ってる？ 尾津野さん」

「……何がだ？」

「ほら、隠野大橋で見つかった謎の血痕。ニュースで言ってたでしょ？」

アレはうちの課の担当じゃないけど、結構大騒ぎになってるし。野犬か熊かが喧嘩したんじゃないかって話になってるけど」

伊吹はこっそりとよそを向いた。あれだけ格闘の跡が残っていれば発見されるだろうと思っていたが、やはり警察沙汰になっていたのか。かといってあの時消していく余裕など全くなかったから、どうしようもない。関わり合いにならないようにしよう、と心に誓った。

「それから、行方不明者。今までは山で人がいなくなってたんだけど、このところ町中でも行方知れずになった人が出てきててねー。ご家族の方が

駆け込んでくるんだけど、どうなってるのかさっぱりで。猟友会に依頼しても、それらしい猛獣なんて全然出てこないし」

「りよ、猟友会!？」

伊吹は思わず聞き返してしまう。そんな人たちが山に続々と入り込んだら、鬼と鉢合わせして余計にややこしいことになりかねない。それに、まだ大勢行方不明者が出ている、というのが意外だった。あの鬼の谷で八本脚の鬼はすうくんが——いや、スクナ様が叩き潰したのだから、多少は被害も減少しているだろうと思っていた。というより、そう願っていた。しかしそんなことはないらしい。

伊吹は俯く。少なからず責任を感じてしまう。

社を開いたのは、自分なのだ。

「……ねえ、尾津野さん」

刑事は再び腰を下ろすと、伊吹に話しかけてきた。

「あの日、電車で襲われたときの話なんだけど」

「え!? ……あ、あまり、話したくない」

「うん、そうだろうね。でもね、一応、わたし個人の興味関心から出た質問として、訊いておきたいんだけど」

——あの時襲ってきたのは、熊なんかじゃないんだよね？

道成寺刑事は、ある種の確信を込めてそう尋ねた。

はっとした伊吹は、とっさに刑事を見返す。

眼を細めた道成寺刑事は、のんびりとした調子で話を続けた。

「あの時は運転士さんが亡くなってるから、わたしも現場検証に立ち会ったんだけどね。当然のことだけど、現場を見ればあれが、熊のやったことでないことぐらいは分かるよ。車体に残っている爪痕や傷も、熊によるものなんかじゃない。周辺の土に残されている足跡も、指が見あたらない上に何だかやたら多い。遺体の損壊状況を見ても、あれがわたしたちの知らない何か異常な生き物によるものであることは、居合わせた警察関係者全員が気づいたことだった。でね、わたしたちには、厳重な箝口令が敷かれたの」

伊吹は視線のやり場に困って、『るーじゅ』の方を見る。ガラスの中では、『るーじゅ』の店主が何かを作って、盆の上に乗せている様子が見え



た。

「なんだかずいぶん、エライ人たちの間で協議が重ねられたらしいよ。マスコミにどう発表するのか。捜査段階で関係者とはどのように情報を共有していくのか。謎の異生物、なんて間違っても言えない。ネットにでも流れたら、どんな変な人がこの町に殺到してくるか分かったもんじゃない。それにこの隠野には、よその町とは違う事情もいくらもある、みたい。わたしはよく知らないけど、『奇妙な化け物』が見つかったからといって、県警の科研においそれと捜査協力を仰ぐわけにはいかない、事情があるみたい。この町の中だけで処理しなきゃいけないこと、っていうのもある、みたい」

不気味なことをしれっと、道成寺刑事は言った。

田舎町には、都会にはない力関係や意思の行き来があるらしい、というのは伊吹も聞いたことがある。ただ、そんなものが現実に機能しているとは、まだ住み始めて四ヶ月程度の伊吹には到底信じられなかったし、それがまして警察にまで影響力を持っているとは、思いたくもなかった。

「とにかく、そういう諸々の事情もあって、いっぱい会議とか電話とかが重ねられた末、尾津野さんへの事情聴取と相成ったみたいね。慎重だったでしょ？」

「……ぼさっとした切れそうにない刑事に聴取されたぞ」

「えー？ あの人相当切れるんだよ。何が凄いつて、一見そう見えないのが一番凄いの。見るからに頭良さそうな人って、大体全然大したことないから。お姉さんからのアドバイス。ま、そんなことはいいとして……そういうわけで、こくりの市警察レベルでは、あれは熊による襲撃として県警にも伝えてあるの。これが公式発表。多少は県警の一部上層部や、鉄道会社の関係者とも裏のやりとりはしてあるみたいだけど」

「……どうしてそんなことを、私に伝えるのだ？」

伊吹は硬い声でそう訊いた。当事者として、あまり愉快な話ではなかった。要するに遠回しに、あの日見たものことは誰にも話すな、と言われてるように感じられる。元々話す気など全くなかったけれど、それは自分の胸の内に仕舞ってあるからだった。分かった上で隠蔽しようとしている連中がいる、となると、むしろ不快感の方が募ってくる。

すると、刑事はきよとした顔で応じた。

「尾津野さんなら、それぐらい知っておいていいんじゃないかと思って。さつきも言ったように今の話はわたしの個人的なおしゃべりに過ぎないんだけど。でも、警察もバカじゃない。行方不明者の急増には、何かしらの理由があるであろうことぐらいは分かっているし、きちんと捜査している。そうと分かれば、少しはあなたの孤独感もなくなるんじゃないかな、と思っ  
つて」

そう言えば確かにその通りかも知れない、と伊吹は思った。刑事は笑う。

「あなたなら頭もいいから、いろんな事情も汲んでくれるだろうしね」

「……そうか。あ、ありがとう」

伊吹はそう、不器用に感謝した。

鬼のことも様々な被害のことも、全てをどこか自分の責任のように感じていた伊吹にとっては、少なからず助けになることだった。このまま一人ですうくんのことも含め背負い込んでいたら、しまいに潰れてしまっていたかも知れない。

そうそう頼りにすることは出来ないかも知れないけれど、もしかすると、辛いときには彼女に話をするというのもよいかも知れない、と伊吹は考えた。伊吹が他人に頼ることを考えるというのは、ずいぶん珍しいことだった。

「しかし……なんでそこまでしてくれるのだ？ 問題にはならないのか」

「えー？ ただわたしがあなたに興味を持つてるだけのことよー。あなたと、あと、あの子に」

そう言っつて、刑事は芝生でどんぐり返しをして遊んでいるすうくんを指さした。紺も一緒になってごろんごろんと転がっている。澄哉はその横で、困り顔をしながら狼狽していた。

それが果たしてどういう意味なのか、真意を知りたくて伊吹は彼女の顔を見つめる。

けれどとぼけた女刑事は、さすがに表情には何も表さなかった。

「……わたしにとって重要なのは、目の前で起きている事件だけ。それととりあえず納得のいく形に収めることが出来たら、それでわたしの仕事は終わりなの。事件にまつわる諸々に個人的な興味を持つことはあるけれど、

でもそれを必要以上に詮索したりはしないわ。安心して」  
僅かな笑みを浮かべて、道成寺刑事はそう言った。

6.

その夜、深夜一時頃。

真っ暗になったこくりの市の道を、酔った一人の女性が歩いていて。つい先程まで高校時代の友人と飲み会をやっていた、市内の会社に勤める、二十三歳のOLである。

彼女はふらふらと歩きながら、実家への道を進んだ。夜中の田舎町というのは、本当に真っ暗で、人影がなくなる。彼女も数ヶ月前までは東京に住んで大学生をしていたので、初めてこの時間帯のこの町の様子を見たときには、啞然としたものだった。

人がおらず、車通りもない。そもそも家の明かりも点いていない。申し訳程度に街灯が並んでいるのと、駅前的一件だけあるコンビニばかりがやたらと明るくて、その他には目に付くものすら何もない。

一番嫌なのは、町がほぼ無音になることだった。東京ではどんな時間になっても、どこかに人がいて話し、音を立てていたものだった。けれどこくりのでは、夜も十一時を過ぎると完全に静まり返ってしまう。むしろ自分の立てる音全てが、どこかに吸収されていくようだった。足音が何にも反響せず、消え去っていく。時折遠くから犬の遠吠えが聞こえて、それが逆に、非現実的に感じられた。

——最近この界限で行方不明の人が増えとるらしいから、気いつけな。朝、家を出る前、母親はそう言っていた。ニュースで聞いたらしい。気を付けると言われても、何に気を付けたらいいのかすら分からなかった。大体母親の情報というのは、そういうものが多いのだ。肝心の話が抜け落ちていて、参考にしようがない。そうやってやると、母親はいやにしゅんとしていた。途端に悪いことを言った気になる。

会社にいるときスマートフォンで調べると、確かにここ一週間ほどのうちに立て続けに数件、この近辺で行方不明者が出ている様子だった。以前から山道での遭難は急増していたらしいが、それと連続するように、町中

でも特にこれといって素振りも見せていなかった人々が、年齢・性別に係なく、唐突に行方をくらましている。ニュースサイトでは誘拐の可能性も示唆していたけれど、男性、女性、高校生から老人まで不明者は幅広く、一貫性がない。犯罪という説は、ピンと来なかった。

しかしそれにしても、こんな簡単に人っていなくなるものなのか、と驚いてしまう。そう思って調べてみると、日本の場合、自殺者は年間三万人以上、行方不明者に至っては、年間十万人以上もいるらしい。警察に通報されていない事例も含めれば、もつといるはずだそう。ますます目が丸くなる。人はいなくなるもの、のようだった。こんな田舎町で行方不明者が続出したらもつと大きくニュースに取り上げられてもよさそうなのに、と最初は思ったけれど、この調子では、五人十人増えたところで、どうってことない、と無視されてしまいそうだった。

——ま、そういうことなら、私が気に掛けても仕方ないでしょ。

彼女はそう思い、暗い町の角を曲がった。いなくなる人はいなくなるものなのだ。悲しい話だが、そういうことだ。自分には関係ない。辛いことがあったら、行方知れずになりたくもなるのだろう。

一方私は、特にそんな悩みも抱えていないし、失踪の予定もない。誘拐されたら困るけれど、それはこれからはちゃんと気を付けていこう。そういう話を明日の朝、母親にしてやろうと思った。

今朝はちよつと、傷つけてしまった。もう母親も年だし、あんまり心配を掛けたくない。笑い話の一つもしてやれば、安心するに違いない。さっきの飲み会で聞いた話でも聞けば、きっと笑ってくれるだろう。

——さて、どの話をしようか。

そう考えたところで、ふと彼女は、道の傍らの空き地を見やった。

歯を剥き出しにして、血走った眼を大きく見開いた人型の大きな何かを立てていた。

今、自分が何を見たのか、彼女が考える暇もなく、それは襲いかかってきた。

彼女を空き地に引きずり込むと、それは鋭利な爪の付いた手で彼女の口

を塞いだ。そして、彼女が生きたままの状態で、大きな口を開くと、彼女を頭から口に入れた。

少しづつ嘔み、砕き、呑み込んでいく。

暴れる間もなく絶命した彼女の手からハンドバッグが滑り落ち、穿いていたロウヒールが地面に転がった。口から彼女の血がだらだらと溢れ出す。しかし、鬼は何も気にせず、彼女を呑み込んだ。

鬼の身体が、少し大きくなる。

少々辺りに滴った血を、鬼は丹念に舐め取る。

その身体が震え、うぞめき、そして大きくなる。

これでもう、ずいぶん大きくなった。